

河内小だより

平成22年11月9日 No.32

【読解力についてのまとめ】

- 情報を読み取る最初のステップは「気づく」ことです。低学年では、比べることで違いに気づく観点を伝えましょう。高学年では、気づきに対しての理由や因果関係を自分なりに考えることができるようになります。そしてそれを確かめるためのヒントを与えてみましょう。例えば、調べ方を教えたり、似たような体験を思い出させる糸口にしたりすることです。
- 解釈するときのベースは、自分の知識や体験です。低学年では、自分の過去の経験から似ていることを探させます。気づいたことに対して、自分の経験や知識を当てはめて考えることをくり返すことが大切です。高学年では、自分の過去の体験だけでは補えないことも出てくるので、身近なところから似たような事例が使えないかよく考えることです。
- 自分はその物事についてどう考えるのか、賛成なのか反対なのか、分かったこと分からなかったことは何かの結論を出します。低学年では、うまく言えないかもしれませんが、考えて分かったことを言葉にさせます。高学年では、分からなかったことやまだ疑問として残っていることも言葉にさせます。次の物事に向かうときの「自分にとって大切」な情報の取り出しにつながっていきます。

子どもの生活改善に専門家の知恵を！

ルポライター 瀧井 宏臣

子どもたちの生活の崩れが社会問題化したのは、いまから10年ほど前のことだ。

日本小児保健協会が実施した2000年の調査では、夜10時以降に寝る3歳児の比率が半数を超えていることが分かった。こうした子供たちの夜更かしは人体実験であり、異常事態だとした、東京医科歯科大学の神山潤準教授（当時）らは「子どもの早起きをすすめる会」を立ち上げ、早起き早寝運動をスタートさせた。

食事については、女子栄養大学の足立己幸教授（当時）らの調査で、小学校高学年の5人に1人が朝食の欠食傾向にあり、4人に1人が孤食、つまり1人で朝ごはんを食べている実態が明らかになった。運動についても、外遊びが消失したことなどによって子供たちの体力・運動能力が著しく低下するとともに、テレビやテレビゲームなどのメディア漬けになっている子供たちの生活実態が浮き彫りになった。

このような事態を受けて、早寝早起き朝ごはんの国民運動やノーテレビデー、遊びの日の取り組みなど、様々な活動が展開されてきた。その後の調査データを見る限り、生活崩壊の悪化にはどうやら歯止めがかかったようだが、まだ改善されたとはとてもいいがたい状況にある。

問題は、こうした取り組みを個別にやっても効果に限界があるということだ。夜更かし、朝食の欠食、外遊びの消失、メディア漬けといった生活の崩れは相互に複雑に絡んでいるため、生活全体をトータルに改善することが必要になる。

そうした認識に立ち、神山氏らは最近、快眠、快食、快動、快便を目指す「四階建ての生活再建」を訴えている。よく眠り、よく食べ、よく遊び、きちんと排泄をするというシンプルな主張だ。子供の生活改善を進めるためには、睡眠、食、運動、メディアの専門家や活動団体が結集して意見を交換する。そして知恵を絞り合い、協働して取り組むことが今、求められているのである。

「内外教育 平成22年7月16日号」より